

プロローグ——すべては一束の日記から始まった

浜野高宏

11

あるディレクターの思い

若き科学者の日記

「日本の『原爆開発』」の真相に迫りたい

本書の狙い

## 第一章 日本は『核兵器の開発』をしていたのか？

浜野高宏

25

一 アメリカ議会図書館での出会い

二 ファーマン・リポート

三 新発見・二〇〇点の研究資料

## 第二章 日本の『核兵器開発』を調査せよ

新田義貴

41

一 世界初の原爆実験が行なわれた『トリニティサイト』

### 第三章

#### アジアを代表する核物理学者・荒勝文策——新田義貴・海南友子

- 二 原爆開発競争に勝利したアメリカ
- 三 明らかに終わった「ファーマン・リポート」
- 四 不発に終わった「本丸」、理研・仁科芳雄の調査
- 五 重要人物として浮上した京大・荒勝文策
- 一 歴史の彼方に忘れ去られた科学者
- 二 緊急事態宣言下での遺族たちへの取材
- 三 遺族の懸念
- 四 学問に情熱を燃やした青年期
- 五 原子核物理学黎明期のドイツへ
- 六 イギリスでたたき込まれた経験主義
- 七 日本植民地下の台湾へ
- 八 アジア初の人工核変換に成功

## 九 京大招聘

一〇 世界を驚かせた「原子核分裂」の発見

## 第四章 なぜアメリカは日本の「原爆開発」を疑ったのか——浜野高宏

一 ドイツ・シュピーゲルTVとの共同リサーチ

二 連合軍が恐れたナチスドイツの原爆開発

三 AL SOS 部隊のスパイ活動

四 Uボート拿捕と日本への疑惑

## 第五章 浮かび上がった「F研究」の実態

新田義貴

一 「核兵器開発」で先んじた陸軍

二 核兵器の開発を京大に依頼した海軍

三 荒勝が主導した「F研究」

四 ウラン濃縮への挑戦

五 湯川秀樹の「科学者の使命」

六 荒勝の葛藤

七 研究レベルに終わった核兵器開発

八 原爆投下と科学者の責任

## 第六章

広島での原爆調査・荒勝の信念と葛藤

海南友子

129

一 原爆投下直後の広島へ

二 科学者として——人類の希望のための研究

三 広島での惨事——荒勝研究室、運命の二週間

四 優秀な学生を失い、失意の荒勝

## 第七章

サイクロトロンで荒勝が夢見たもの

浜野高宏・新田義貴

151

一 一九四五年十一月

二 京大に眠る荒勝の夢の残骸

## 第八章

### 戦後、科学の原罪と向き合った核物理学者たち——海南友子

171

- 三 加速器で成果を出し続けた荒勝
- 四 映像に記録された、破壊
- 五 荒勝の落胆、スミスの苦悩
- 六 大学院生からマッカーサーへの抗議書簡
- 七 誤りを認めた米陸軍長官
- 八 スミスが残したメッセージ
- 一 戦後のサイクロトロン再建と世界の核開発競争
- 二 清水榮、第五福竜丸と水爆実験解明への執念
- 三 清水リポートから——科学者の平和宣言「ラッセル・アインシュタイン宣言」
- 四 湯川秀樹博士の平和運動
- 五 信念と努力の人、荒勝が遺したもの

## 第九章 「F研究」が現代に問いかけるもの

新田義貴

199

- 一 荒勝の遺志を受け継ぐ者たち
- 二 学会会議問題が問いかけるもの

あとがき

浜野高宏

209

解説

政池 明

213

参考文献・資料

227

- ・本文中、敬称を省略した場合がある。
- ・英文資料はとくに断りのない場合は筆者による翻訳である。
- ・資料の引用は原則として、旧字体を新字体にあらため、旧仮名遣いはママとした。また読みやすさを考慮して、改行、句読点、漢字・平仮名なども適宜あらためた。

## プロローグ——すべては一東の日記から始まった

浜野高宏

### あるディレクターの思い

企画は生き物だ。ただし、自ら動き回る動物ではない。《一本の木》のようなものである。「小さな種」を植えて水をやり、いい環境で育てれば、たくさんの枝が伸びてくるし、素晴らしい花や実もなる。テレビや映画の世界で映像作品を制作している私たちの仕事はそれに似ている。誰かが見つけたネタがきっかけとなり、やがて素晴らしい作品へと育っていく。

当然、芽が出かかっているときに誰かが踏みつけたらそれで終わり。育っている途中で切られてしまうこともある。そうならないよう、何人ものスタッフが集まり大切に育てていく。時にはそこを更地にして新しい建物を建てたいと思う人もいるが、そんなときは見つからないように隠したり、うまく育たず枯れかけたときは、どういう肥料が必要なのか詳しい人に聞いて回ったりするのだ。本書もそんな「小さな種」から生まれた果実のひとつだと思っている。

たしか二〇一五年のこと。最近は、連続テレビ小説「ひよっこ」や大河ドラマ「青天を衝け」の演出を手掛けるNHKドラマ部の黒崎博ディレクターから、相談を受けた。太平洋戦争末期から終戦直後に書かれた日記にインスパイアされて、映画の脚本を書いたから読んでほしいという。以前、別の取材で『広島県史 原爆資料編』を読んでいたとき、たまたま、その日記の抜粋を見つけて興味を持ち、その後ご遺族を探して、当時のノートに書かれた日記のコピーを取らせていただいたそうだった。

「映画のテーマは日本の核兵器についてなんです。どう捉えていいか難しいと感じる人が多くて……」と彼は話し始めた。それが私に持ってきた理由だった。一九九〇年にNHK広島放送局に入局して以来、原爆に関するドキュメンタリーを私は作り続けてきた。そのことを知っていたのだ。

彼は日記に記されていた、後に核物理学者として京都大学名誉教授となる若き科学者・清水榮<sup>さかえ</sup>氏の喜怒哀楽に共感、一〇年かけて時代背景なども入念に調べ、脚本の第一稿を書き上げたという。こういう相談は時々受ける。企画が面白そうと思っても、結局、作品に結び付かないケースも多いので、安請け合いはしないよう、まずは読んでみると返事をして脚本を受け取った。

夜。自宅で脚本を読み出すと、ぐいぐい引き込まれた。